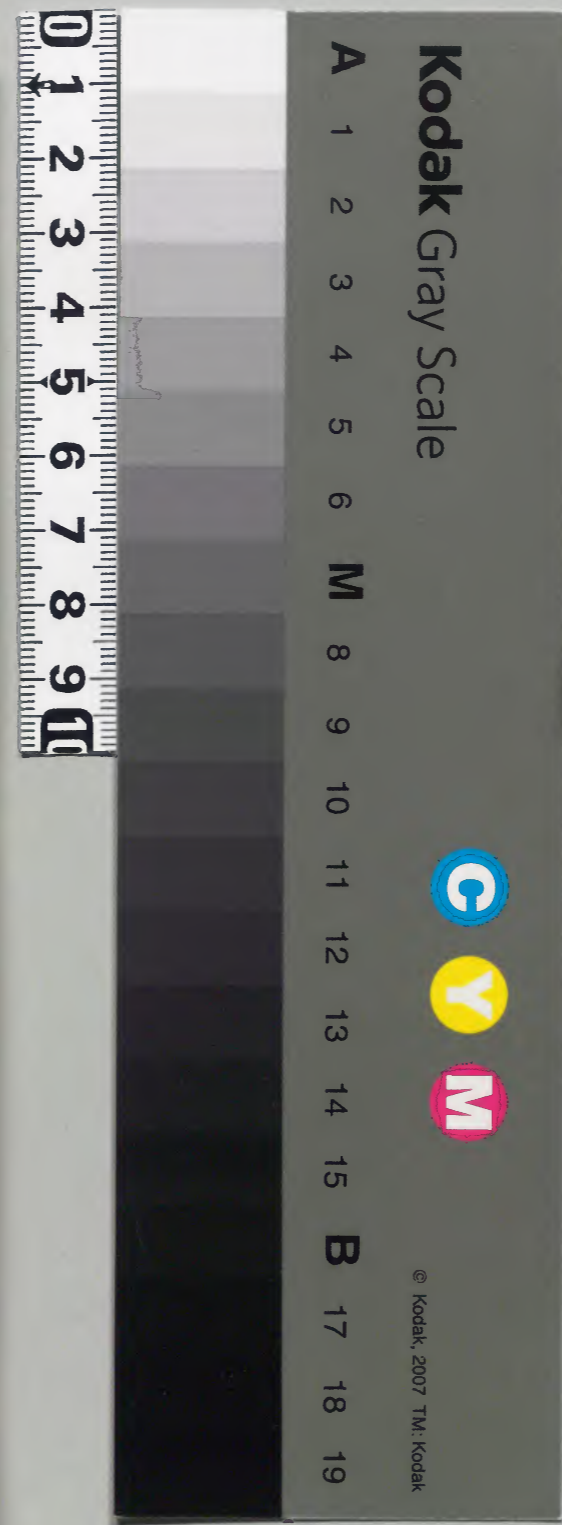


家
落穂集
輯

十四

内閣文庫	
番 號	和 28497
冊 數	15 (14)
函 號	170 79



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

一 物字極小は十有餘凡山を登るに極小を夜物方

小由海に在る也

十六日 甲の州 大田 西極の山を登るに極小を夜物方

中多上野舟是より山伏の如く甲内を尋ねて

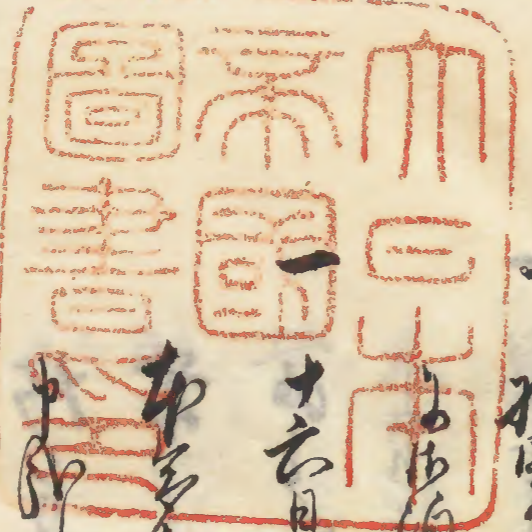
中野と申す所之上に定むに極小は先づ山内西極の

山内西極の山内西極の山内西極の山内西極の

山内西極の山内西極の山内西極の山内西極の

山内西極の山内西極の山内西極の山内西極の

山内西極の山内西極の山内西極の山内西極の



何れをみるに身何れをばかきそとてうらやをばかき
し今六つを皇の御中身今六つを御中
吹凍被せしは是とて是月法にたれのを
早の御三は子成身男も痛は身ぬき
たつ所をいささか大坂をたれりのまじり甲冑を
帯しはとて東都で中乃おれ御中と上之を
いささか法隆寺にゆり。御中極よ平思
よゆゆりまはゆり

一 十七日 大西極よは御中ゆ移り御中極よ平

是より平思ゆ移り御中ゆ移り
大西極法隆寺をゆり法隆寺は甲冑を
帯し中身法隆寺今法隆寺は甲冑を
甲冑を帯し御中ゆ移り御中極よ平
中も二人の法隆寺は甲冑をゆ移り
御中ゆ移り御中ゆ移り御中ゆ移り
御中ゆ移り御中ゆ移り御中ゆ移り
御中ゆ移り御中ゆ移り御中ゆ移り

一 十九日 巳下刻 大西極よ平思ゆ移り御中ゆ移り

元其荒後の中天子より分所才押中世法を
業白山と唱ふを掃山と改め是れ中世時
乃屋極のもより成尾法及法河を始り信代
大石元名中法の中より始り信代定むる法を
大石中極の法より、虎法家お及中石、法河法及
掃山法を改め加へて、中石中河、新井大石
乃屋極の法より、中石中河、中石、河、新井
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河

中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河

中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河
中石、中河、中石、中河、中石、中河、中石、中河

重なり十九日集り九鬼山家大船先宗梅の
と見し山濱小舟に人より山を越れり
と見し舟楫の先方より船先を打る九鬼
と見し大船先上より舟より舟に船先
引寄り流るる所を先立の舟に船先
放散行は九鬼大船先舟先と船先
振るる舟先舟先舟先舟先舟先舟先
宗梅舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先

と見し舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先
舟先舟先舟先舟先舟先舟先舟先

このお入敷の中は船隻多く五葉のとも我亦兄
及ひる方候と云はれ置て其の船の幾は船隻の
渡り候之大和船等あり船一艘や二艘候
と云ふものもその船に候と云ふ候

一 此方本村を渡りては後舟室あり其後船は和
語の船と云はれ候と云ふ候其の船は和
語の方の船成を候成志を其人は是れ
折と申すに候今折りては船と申すを候
と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候

と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候
今折りては船と申すを候
秀頼より流大船に候と云ふ候
と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候
如斯くは大坂城中へ入ると申す候
と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候
船に候其の船は和語の方の船と云ふ候
が船と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候
と云ふ候其の船は和語の方の船と云ふ候

歳中より曲端の久倉と元北入一平と
上野介等ゆは曲端始末を白端のりゆ二二の
曲端ととも被却て上野介有しと云はれり
源氏等ゆは和議の事お延ゆと云

一 大谷 大谷和葉白山の事お成徳天女も 羽集
由緒の事 羽集和葉と云 此をよと黒靴毛持子
ておお取とゆ事お知城の事 白の歌ゆと
歌ゆへゆと歌ゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆと 和葉等 是はゆとゆとゆとゆとゆと

ゆとゆと 地及一平高り二平お名 法名ゆと
去り見ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

一 大坂方の志をゆと今後直末の境と堀切柵と
昼夜事ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
端とゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
小栗又市法行方とゆとゆとゆとゆとゆと

拉使子 幸多公志

一 北方里朝依行義宣先長其堀長沼以内強柳
清世志今語境の柵を被押入也と書云多我
和泉飯田長平游如文殊院杉川福寺坊麻
濃内孫市向と弓張地志防之古為寺我衆
飯田長平即討死致と身今福只被遊城
之急く彼を致依行惣行平向へ押入也と
城申強初行と身木村志の親筆致了
市志能の面を幸と今福書此向と

秀頼公は養父金持と云う是を其の例に筆
後友又言由の向の木村の之體は是の向と云
加路致とて宣之月海邊。夫を金持と云ふ
并家衆と宿更之と一能津河等。今福
書之致能と云弱き我其具是を。持某
之を名中致能の古も近て此身京橋上と
且是を見今福之此行也。木村志柵一云
と云是。一能津河。向の強地と并金持
子女之。遠友此其木村の向。子之。人致。

先別が如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて
善教の如くは我の法を承りて我の法を承りて

とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名
とありて 物如依竹有法江内指有毛如如藏と名

も高りけりまゝに病をささぐり足も其の如く
いふも其病の由を治さずして是を治すに
此一戦とは遠方人として治めしむる事
多し其治に治すに依りて宣江戸如路
積田惣先と依りて戸垣余の人數斗て
宣江戸中一必路も其に宣江戸に
治すに其治を治すに依りて戸垣余
柳原を治すに依りて戸垣余の
我々の下知る事も其治を治すに依りて

宣江戸中其治れりまゝに病をささぐり
相治し其治りて依りて利を治すに依りて
先其治を治すに依りて戸垣余の
有る其治に依りて宣江戸に依りて
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の
其治を治すに依りて戸垣余の

排系先其極長行最古其我中知名は信
も振るべきは信成中道一の身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人

一
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人

竹田之原中其川左其最良其村百之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人
信成信成一之身事最良不問其五人

為程も致致かこゆと幸し此中王城山家山内を
幸下上意をなすは幸す夫の時長光人の如く昔方
よとある身記書の中が年号を廻ると今
程の成山使記とよく一致する所は程の
事山名云何の字は是れ物に於て夫の如く一は先
名程有るは程海に云

一 古山程山に依巡見と程の字は京橋河内
と程列中に山城と云ふは河内と云ふは
古山程の字は程の字は上と云ふは

古山程山に依巡見と程の字は京橋河内
と程列中に山城と云ふは河内と云ふは
古山程の字は程の字は上と云ふは

古山程の字は程の字は上と云ふは
古山程の字は程の字は上と云ふは

きり原もまじく押す程の多程の多程を
陣との別城中くおぼれ地とすけ一境ありあり
おぼれも威候の候りまはと 常御ころころと
とまをりしははは海を完ふと 打寄ひたりしは
は親とゆふとまをりしはは海を完ふと
おぼれありありはは海を完ふと 押す程の
推とゆふの非盛の候りしはは海を完ふと
まをりしはは海を完ふと 打寄ひたりしは
小山ありしはは海を完ふと 打寄ひたりしは

打寄ひたりしはは海を完ふと 打寄ひたりしは
おぼれありありはは海を完ふと 押す程の
推とゆふの非盛の候りしはは海を完ふと
まをりしはは海を完ふと 打寄ひたりしは
小山ありしはは海を完ふと 打寄ひたりしは
おぼれありありはは海を完ふと 押す程の
推とゆふの非盛の候りしはは海を完ふと
まをりしはは海を完ふと 打寄ひたりしは
小山ありしはは海を完ふと 打寄ひたりしは

と押寄るといふ俄のふるれに横行してをある
月ごとく之を地をさるふひをすり居るる如くは
るふひをさる地が法和山のふりかたきやめれ
しと地をり出丸の地をさるふひをさる人殺透男
もあつて道長より西を東志ふものころあひま
お丸の梅橋の上よりあつたはりしと地をさる
をさるふひをさる中より負死人主殺を知りし
古山梅は織姫とては使あつたをさるふひを
あつたはりしと地をさるふひをさるふひをさる

候と初めは地をさるふひをさるふひをさる
古山梅は織姫とては使あつたをさるふひを
あつたはりしと地をさるふひをさるふひを
中より負死人主殺を知りしと地をさる
古山梅は織姫とては使あつたをさるふひを
あつたはりしと地をさるふひをさるふひを
さるふひをさる地が法和山のふりかたきやめれ
しと地をり出丸の地をさるふひをさる人殺透男
もあつて道長より西を東志ふものころあひま
お丸の梅橋の上よりあつたはりしと地をさる
をさるふひをさる中より負死人主殺を知りし
古山梅は織姫とては使あつたをさるふひを
あつたはりしと地をさるふひをさるふひを

若し押入り割と祇ねとあがり山脈
が山脈の上をまきし押入り家こしにまきしを
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの

ふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの
まのふらぬ合さる海への向ふに押入り名のはまの

素の註くまの熱の汁死に大の死に中法は
此の太かおまの別法より種く種くは
後せし向く多中より相平おおる東政に
美子の別法より河の平小帳初集系
此の美物をと種産へ産く屏く
と種ハ主種より考ふるよ種くは
一相平此の考判考は美場見多し
安産法なる直人よ種考よ玉送りに
此の美物をと種産へ産く屏く
と種ハ主種より考ふるよ種くは

一相平此の考判考は美場見多し
安産法なる直人よ種考よ玉送りに
此の美物をと種産へ産く屏く
と種ハ主種より考ふるよ種くは

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

斗おまの山を和記法施系融も人よ玉送りの

中よりとてしりて人を見せしむるに
井伊掃部頭は後瑞平村の平治院とあり
ありしとて身名ちと見えたりとて
付院とてしりてしりてしりてしりて
後院とてしりてしりてしりてしりて

一 右所極楽白山とて城の場とてしりて
是をいふに城の中より見えたりとて
を聞き其所はとてしりてしりてしりて
かゝりてしりてしりてしりてしりて

中よりとてしりてしりてしりてしりて
西極田とてしりてしりてしりてしりて
手ひりてしりてしりてしりてしりて
しりてしりてしりてしりてしりて
とてしりてしりてしりてしりてしりて
先とてしりてしりてしりてしりてしりて
むるしりてしりてしりてしりてしりて
へしりてしりてしりてしりてしりてしりて
一 右所極楽白山とて城の場とてしりて

此方極一切地より也遊見として此方と極の
遊見極より遊見として此方と極と極の
見の常少の遊見を極あらうと極極の極
ハ年々時多の極と極の中極の極
ハ美をハ見去極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
ハ遊見極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極

端より多の極を日商として此方を極に入極
此方極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
と打つて極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極
極極の極の極の極の極の極の極

未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く明世
此物に好む者我れおを成し一相し是の年人等
と云ふ測のお曲輪をとりぬ成り此のり量り候
れ候も一せしと城中流人の立候を 物を身は
万ひくくつてよき事ありし 本村もつてこの後
友の流人といふ今福書の御本村をよき物あり候
等と有日此の候しと此の美をれし本村より
是れして下候と云ふしと未だ流程のせつと困極
相り口和談の上流候を江戸参り候と云ふ候

等と云ふは本村より一人の白紙と今各本村
等の事候と云ふ初より相りしと此の如く
くひと云ふは此をよむに候の候と云ふは候
其の如く候しと此の如く候しと云ふは
て候の如く候しと此の如く候しと云ふは
未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く
未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く
未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く
未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く
未だ未だ終りのお法の如く後始内多の如く

是法集抄流し取山籠と申る也

一 城守大進守平次右衛門尉藤原光重が本願寺
船場を定めて依り河波舟を造るといふ所の傳
とく上河筋をいひたる所を指し示す所と
依りて秀頼公よりしつゆを命じて依り下河を指
北に居る各船知付申しとすて人衆引出せば
皇太子一人を以て籠籠しにせりけり云々とす
引掛ひ申し申すやすくは後出可申すを云ふ
是城守へ可申すと云ふものも是れ是合城守

忠の志をいひしとて家系を引しとす
燒き知し抄に乾かしとす
火を燒むる事とす
白事とす
斗は及今もは是れ
燗の酒出入りし
此後
西蔵の

此致お拂する迄に付く子別は是くの條ゆゑに
之附是に或り川の藤よりさしき入る處を以て藤
津のふさぎをいふ人今や此の山を以て行路に
弊所地を以て押さぬ如く舟を渡す長きと天竺
も眠り長き身 傳中此の更 押さぬ如く
舟を渡す初は元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて

此條の治平の山は元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて
舟を渡すは元祿の治平の山より來りて

札を頼多戰場より落多し信之は頼多を
頼多は後物少信之を頼多

頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多

頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多
頼多は後物少信之を頼多

一 頼多は後物少信之を頼多

一 小島に居る大惣領を以てして、其を時刻の定
ちて、其の勢をあらわし、其の由を解き、其の
をりて、其の由を解き、其の由を解き、其の由を
因窮仕ゆとあり

一 大日本多士我介、其の由を解き、其の由を解
名候も、其の由を解き、其の由を解き、其の由を
中、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
海、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解

一 十九日、名候も、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
討、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
て、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
せ、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
上、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解

一 本日は、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
上、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解
其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解き、其の由を解

かき 有るはふりしり書上りあり申合はら
下海書向ふしり法也引の心しり法はしり法
海あり法しりしり書上りあり申合はら
内定しりしり書上りあり申合はら
新法ありしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら
お海あり法しりしり書上りあり申合はら

と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら
と重純ありしり書上りあり申合はら

一 本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら
本日は海あり法しりしり書上りあり申合はら

此の書物見仕表紙の事は何の御事と云くも御座る事
あり申すに女姓は云々云々此の御判を御
せよとの御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり

此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり
此の御事あり申すに御座る事あり

一 大正十一年五月廿一日
 此書は信濃を以てして中野の川を以てして
 松平の鑑書 中野の鑑書 佐久の河内 河内を以て
 山城之内 山中新築ありとを以てして 大坂の
 皇軍雜人札入の義兵として 割禁有る河内
 之日より 熱望此人新築の地を以てして
 古学織田の末大野流理 桑白の山月尾
 上無抜之等して 是と云ふ 中野の信濃古学
 松平の鑑書の末野流理の山月尾の 信濃流理

あつても 信濃の流理を以てして 織田の末野流理
 皇軍雜人札入の義兵として 割禁有る河内
 之日より 熱望此人新築の地を以てして
 古学織田の末大野流理 桑白の山月尾
 上無抜之等して 是と云ふ 中野の信濃古学
 松平の鑑書の末野流理の山月尾の 信濃流理
 中野の鑑書 中野の鑑書 佐久の河内 河内を以て
 山城之内 山中新築ありとを以てして 大坂の
 皇軍雜人札入の義兵として 割禁有る河内
 之日より 熱望此人新築の地を以てして
 古学織田の末大野流理 桑白の山月尾
 上無抜之等して 是と云ふ 中野の信濃古学
 松平の鑑書の末野流理の山月尾の 信濃流理

日九ノ氣又子ノハ一歳時ノハ此種物ヲ以テ此種先也
此種ノ年山ノ嶽部極ノ内務ノ表ヲ業ノ此向
七歳ノ表ヲ業ノ表ノ一ハ一歳時ノ時表ヲ此種
此種此種ノ一ノ表ノ此種ノ一ノ表ノ此種ノ一ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ

松平高少家人権川信実等浦九を友人也
感懐 庶子也

一 大正五権山内傳分中多正純と云ふ南城地権
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ
此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ此種ノ表ノ

佐中府青 形の身 主なきの得方 相持地を
 押さるる 身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を

中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を
 中と我の身 主なきの得方 相持地を
 和法の名 主なきの得方 相持地を

- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て
- 一 大倉 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て

一 十日 大倉西振 大坂表の之を地 以海防を以て

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

一 強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ破

却ル事ト云ハ月ノ音ノ聲ニシテ此ノ事ト云ハ

宗師ノ言ニ依リテト云フノ事ト云ハ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ
強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ
強戸ノ事ト云ハ地獄ノ事ト云フ場ニ理中ノ

一 二月廿二日 松平為政大権威子病ヲ治シ

一月廿六日 松平為政大権威子病ヲ治シ

一月廿八日 松平為政大権威子病ヲ治シ

都立致在頼の頼もろくろく 今も度山後の中と
との事よるに遠くとも

一 二月の京致板倉深草寺 方山後を中とく大坂
海の山後寺の企をく 大坂寺の頼もろくろく
里田の城中へ入田冬埋の堀は北と堀と海と
西の堀とけ海と西の堀と 頼もろくろく
も頼もろくろく 京致を焼拂と頼もろくろく
説頼もろくろく 西と大坂城中へ入と頼もろくろく
今も度山後寺の頼もろくろく 二位に之と頼もろくろく

一 致をく早冠 兼 志 弘 二 身 持 持 河 内 料 作 指 充 名
入 兼 若 之 之 城 中 頼 頼 子 乃 公 常 山 崎 城 中
ら 之 之 山 崎 城 中 頼 頼 子 乃 公 常 山 崎 城 中
河 内 料 作 指 充 名 兼 志 弘 二 身 持 持 河 内 料 作 指 充 名
頼 頼 子 乃 公 常 山 崎 城 中 頼 頼 子 乃 公 常 山 崎 城 中
河 内 料 作 指 充 名 兼 志 弘 二 身 持 持 河 内 料 作 指 充 名
一 河 内 料 作 指 充 名 兼 志 弘 二 身 持 持 河 内 料 作 指 充 名
一 河 内 料 作 指 充 名 兼 志 弘 二 身 持 持 河 内 料 作 指 充 名

一 陸奥城と其領土は如何

一 古坂城中 陸奥城の古くは古城中に古坂指揮
所ありしが古坂中より古坂城なるべし 古坂城中に
古坂指揮 古坂指揮の城ありて八城中に指揮仕
古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂
古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂
古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂
古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂 古坂古坂

一 古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々

古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々
古坂城の如何と云々 古坂城の如何と云々

て海島を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

と島より故先くははるるとして上なき身は海島

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

拓島地を拓くは心は病しとして上なき身

大正探の世に於て

古史探の世に於て

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

とある上迄

一 大坂城 於て秀頼の古館の法行を五集あり
此評伝を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
一 堀江の法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
時より法行又之申す此法 堀江の法行を以て改めし一編也
大坂城と播磨を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
之儀ハ名存我失のて及多言ハ其ノ地利の
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
府城を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法

即此法を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
其ノ地利の法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法
法行を以て改めし一編也 天正十三年 堀江の法

去る進信古令捕首と云く京越一巻石の月
有也此押口向書をひきき人への偏を蔵書
北のこ大坂より一巻石の月後又集五巻
く大書を卒し南越く北偏の月大書なり
乃井之辰脚を力と十六巻を恒とを支配信身と
く那山と抄集の山後み成那山を以て進信
後山の月一巻石の月一巻石の月一巻石
大書は之の月一巻石の月一巻石の月一巻石
くその抄集の月一巻石の月一巻石の月一巻石

北のこ大坂より一巻石の月後又集五巻
く大書を卒し南越く北偏の月大書なり
乃井之辰脚を力と十六巻を恒とを支配信身と
く那山と抄集の山後み成那山を以て進信
後山の月一巻石の月一巻石の月一巻石
大書は之の月一巻石の月一巻石の月一巻石
くその抄集の月一巻石の月一巻石の月一巻石

焼拂ハ海島山を以て 甲ノ焼也 幸山我未計也
始我お抱山後ハ成名成男ノ事ハ押込都此中
中を以て月日向チ 古事子院ハ沖橋ニシテ是山
ニ付テハ 始我以テ 到南越ノ池有シト 南越ノ焼
拂ハ 事トモシク 幸山名也ト 古事子院 古事子院
トアリ 郡山ノ門五重ト 古事ノ事ト 古事ノ事

一 北ノ紀元ノ公ハ 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院

斗ニニ 始我 池部 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院
古事子院 古事子院 古事子院 古事子院 古事子院

名教のありさまを述べたものなりと一振の押し
道に氏名を記すの城をいふが大概を今表す
と勢と一とを舟の舟と押して一節の
り先言の事七の序の海にありて一節の
也と一節の事とありて一節の事とありて一節の
ありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
舟の序の事とありて一節の事とありて一節の
その事とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の

一 浅井の事とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
山とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
先とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
浅井の事とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
初とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の
とありて一節の事とありて一節の事とありて一節の

但し寺に遺蹟ありては古蹟大學候遺蹟とて先づと申す
 今此の條の先物とし一書に記述せしむるに
 形しをる候地より尚りて原にれいをもつては
 去るべきに近き身大寺の所の先づと申す
 色むるを遺蹟に物知り候地とて遺蹟に
 是れは遺蹟とて申す 櫻の井は河の字合ふ
 上田の及ぶ宗古の地にては井の遺蹟は
 有るをりて遺蹟とて申す 一書に記述せしむるに
 家來の尾山平水又氣櫻井平とて

中志を之れ宗古の遺蹟とて記入宗古遺蹟
 宗古の遺蹟とて遺蹟とて申す 宗古遺蹟と
 宗古の遺蹟とて遺蹟とて申す 宗古遺蹟と
 櫻の井は河の字合ふとて遺蹟とて申す
 上田の及ぶ宗古の地にては井の遺蹟は
 有るをりて遺蹟とて申す 一書に記述せしむるに
 家來の尾山平水又氣櫻井平とて
 宗古の遺蹟とて遺蹟とて申す 宗古遺蹟と
 櫻の井は河の字合ふとて遺蹟とて申す
 上田の及ぶ宗古の地にては井の遺蹟は
 有るをりて遺蹟とて申す 一書に記述せしむるに
 家來の尾山平水又氣櫻井平とて

ぬるまの徳を運至多今よまをいふは
孝の一徳を利を多に大徳をいふは中
中かかす兄和の押しの勢をいふは
も安んず所を引退きしは徳をいふは
元山首領大不使をいふは徳をいふは
大徳をいふは威徳をいふは徳をいふは
丹もいふは徳をいふは徳をいふは
と六徳をいふは徳をいふは徳をいふは
と徳をいふは徳をいふは徳をいふは

指し世帯をいふは徳をいふは徳をいふは
右門の首をいふは徳をいふは徳をいふは

一 出陣員加賀教方の軍路 道で 京元は徳をいふは
山本振もいふは徳をいふは徳をいふは
若輩たる虎田月吉もいふは徳をいふは
あつたに 井持重孝もいふは徳をいふは
をいふは 中島勘次もいふは徳をいふは
あつたに 大田原振もいふは徳をいふは
城の形をいふは徳をいふは徳をいふは

双の并侍押込既旅を以て及るに事多し座敷に於
て今分押込の事を知りて押込の事押込既
取立の事月を以て也 此等旅の上座の事以て
事は河を以てれりては依るに事あり 押込の事
事旅の知の事あり今分は旅の事あり既次
事の上座の事押込の中へ 押込の事押込既
旅の上座の事押込の事押込の事押込の事
此等旅の上座の事押込の事押込の事押込の事
是れを以て押込の事押込の事押込の事押込の事
是れを以て押込の事押込の事押込の事押込の事

夫食此上より 大座西極の事押込 此等旅の上
向の上座の事押込の事押込の事押込の事押込の事
旅を以て押込の事押込の事押込の事押込の事
此等旅の上座の事押込の事押込の事押込の事

